隠された怒り
――『旅人よ、スパ…に赴かば』の語り――[1)]

川口　眞理

1．序

ハインリヒ・ベルの短編小説には一人称形式の作品が多い。なかでも初期の短編は、形式の類似性に加え、ほとんどが戦中戦後の諸相に題材を取っているため、一見どれも似たような印象を与える。しかし詳細に見るならば、アクチュアルな題材を物語に昇華するにあたって決して一様ではない一人称形式の諸技法を駆使しているようにも思われる。本稿は、ベルの初期の代表作とされる『旅人よ、スパ…に赴かば』(„Wanderer, kommst du nach Spa...“)[2)]を取り上げ、その語りの分析を行うものである。

物語は、第2次世界大戦で負傷した少年兵が今は病院として使われているある建物に運び込まれるところから始まる。少年は、建物内の様子から、そこが自分が少し前まで通っていたギムナジウムではないかと察するのだが、なかなか確信を抱くことができない。しかし最後にそれが事実であることが明らかになる。かつて授業で黒板に書きつけたままになっていた自分自身の筆跡を見つけたからで、その筆跡が作品の表題でもある『旅人よ、スパ…に赴かば』という言葉である。そしてふと目を上げてみる

1）本稿は1998年5月23日に学習院大学で行われた学習院大学ドイツ文学会第2回研究発表会における発表の一部に加筆修正を施したものである。

2）Böll, Heinrich: Wanderer, kommst du nach Spa... In: Heinrich Böll Werke. Romane und Erzählungen 1. 1947-1952 S.487-497 Hrsg. v. Bernd Balzer. Bornheim-Merten/ Köln (Lamuv/Kiepenheuer & Witsch Verlag)1977, ergänzte Neu-Auflage 1987.

本稿のテクストとしては上記のものを用いた。引用箇所はすべて括弧内に行数を指示。

と、今や彼には両腕も片足もなかった、というところで話は終わる。

こうした痛切な戦争体験を、主人公である〈私〉が出来事の時間の流れに沿って語っていく。その際かなりの部分を〈私〉の心情の再現が占めているが、そのほとんどに体験話法と内的独白が用いられているのが、語りの観点からこの物語を見たときの大きな特徴である。それは全体のおよそ三分の一に及ぶ。こうした心情再現の二形式の併用、ことに体験話法の役割に関しては、鈴木康志氏がすでに次のような点を指摘している。[3)]

> まずこの二つの場面では内的モノローグは形式的には平叙文で、内容的には「私」の思考であっても説明的な場合が多い。本来地の文でもよいはずの説明的な部分に内的モノローグが用いられたのは、重傷者の刻々とした語りとしては、断定的な過去形による地の文よりも内的モノローグの方が適しているからであろう。一方体験話法は、疑問文、感嘆文、条件文などで感情的な表現に用いられている。（中略）このようななかで感情再現部の表現にもっぱら体験話法が選ばれたのは、その感情的な内容の反面体験話法は過去形が保持されることにより物語として安定した文体が形成されるからであろう。そしてこの作品における体験話法の役割もまさにこの点にあるのではないか。[4)]
>
> この体験話法が用いられることにより、つまり過去形が保持されることにより、モノローグに流れてしまう物語の不安定性に歯止めがかけられているのではないか。これは体験話法部分の原文をすべて内的モノローグに書き換えたものと比較してみれば明ら

3）鈴木康志:Heinrich Böllにおける一人称体験話法—『旅人よ、スパ…に至りなば』を中心に—『筑波大学言語文化論集』第24号 1988 S.131-S.144

4）鈴木康志 ibid. S.140 Z.17-Z.27

5）鈴木康志 ibid. S.141 Z.4-Z.9

かである。体験話法はこの場合、過去形により絶えず「語る私」の関与を示し、物語としての性格を作品に与えている。[5)]

鈴木氏の関心は「一般には内的モノローグと混同されていると思われる一人称体験話法に焦点を当て」[6)]て、それが作中で果たしている役割を分析することにあり、こうした観点からこの作品の内的モノローグと体験話法の出現箇所を分析し、その文体上の相違を上記のように指摘している。

本稿ではこうした従来の成果を踏まえた上で、語りの展開にしたがって内的独白と体験話法が埋め込まれている物語状況の分析を行い、そのなかで二形式の機能についても再考を行う。

2. 分　析

2.1　冒頭部の語り

物語は〈私〉の乗った車がある建物の前に到着するところから始まる。

① Als <u>der</u> Wagen hielt, brummte der Motor noch eine Weile, <u>draußen</u> wurde irgendwo <u>ein</u> großes Tor aufgerissen. Licht fiel durch das zertrümmerte Fenster ins Innere des Wagens, und <u>ich</u> sah <u>jetzt</u>, daß auch die Glühbirne oben an der Decke zerfetzt war; (1-5)

3行目に登場するichという語り手は、最初から〈体験する私〉の影に身を潜めている。それを示唆するのは時と場所の副詞jetzt, draußenで、jetztは前後関係から明らかに〈体験する私〉の現在であり、場所の副詞draußenも〈体験する私〉からの空間把握であることを示している。以後の地の文においても時と場所を示す言葉としてはjetzt, daが度々登場し、

6）鈴木康志 ibid. S.131 Z.19-Z.20

語り手の〈いま・ここ〉が〈体験する私〉の現在にあることを暗示し続ける。また1行目のder Wagenの定冠詞、2行目の ein großes Tor の不定冠詞の使用も、物語世界が最初から〈体験する私〉の知覚のパースペクティヴに基づくものであって、話者を物語に導き入れる語り手が不在であることを感じさせる。これはいわゆる〈体験する私〉の優勢な語り出しであり、読者は冒頭から早速、年齢も外見も定かではない〈私〉に引きつけられることとなる。こうした読者の読みの姿勢を方向づける導入部に続いて、担架で建物内を運ばれていく〈私〉の目から見た周りの様子が語られていく。

② Aber ich war nicht tot, ich gehörte zu den anderen, und sie trugen mich die Treppe hinauf. Erst ging es in einen langen, schwach beleuchteten Flur, dessen Wände mit grüner Ölfarbe gestrichen waren; krumme, schwarze, altmodische Kleiderhaken waren in die Wände eingelassen, und da waren Türen mit Emailleschildchen: VIa und VIb, und zwischen diesen Türen hing, sanftglänzend unter Glas in einem schwarzen Rahmen, die Medea von Feuerbach und blickte in die Ferne; dann kamen Türen mit Va und Vb, und dazwischen [...]. (19-28)

最初の文にはまだ〈語る私〉の声が聞き取れるが、それ以後は、建物内のさまざまな事物が〈体験する私〉の目に留まった順に、そして意識にのぼったときのままの言葉で再現されている。これは作中人物の限定された視点、内的視点からの外界描写で、読者が知ることのできるのは廊下沿いの絵やドアなどの、〈体験する私〉の目に映った断片的な映像のみである。ここではすでに〈体験する私〉は、外界の事象を己が意識に反映させ

る映し手的人物であると言え、〈語る私〉の存在は、わずかに動詞が過去形であること以外にはほとんど認めることができない。このような〈語る私〉の後退と〈体験する私〉の意識を介した外界の描出は、冒頭部からの語りが一貫してpersonalな語りであることを示している。こうした外界描写は〈私〉が図工室に運び込まれるまで続き、今度は〈体験する私〉の内面世界が語られ始める。

2.2　内的独白の出現

〈私〉は担架で運ばれていくうちに、周りの様子から、ここはもしかしたら自分の母校ではないかと思い当たる。その驚きと、にわかには信じがたい気持ちとが次のような言葉で表される。

③ ***Alles das,*** dachte ich, ***ist kein Beweis. Letzten Endes gibt es in jedem Gynasium einen Zeichensaal, Gänge, in denen krumme, alte Kleiderhaken in grün- und gelbgestrichene Wände eingelassen sind; letzten Endes ist es kein Beweis, daß ich in meiner Schule bin, wenn die Medea zwischen VIa und VIb hängt und Nietzsches Schnurrbart zwischen OI a und OI b.*** (93-99)

„dachte ich, "という伝達動詞による導入、およびそれ以外の動詞が現在形であることから、この部分はすべてが内的独白であることがわかる。[7] またここから8行ほど後でも同じような〈私〉の懐疑の念が語られるが、そこでもやはり内的独白が用いられている。[8] 心情の再現形式として二つの選択肢があり、また物語全体では二つがともに用いられているなか

7）引用箇所のイタリック体は以後もそれが内的独白であることを示す。
8）Böll, Z.116-Z.122

で、ここではなぜ体験話法ではなく内的独白が特に好まれているのであろうか。手がかりとなるのは、語りの媒介性の観点からみたときの二つの形式の違いである。

一般に内的独白においては、読者は作中人物の心の中を直接のぞき込むような錯覚を抱く。それは過去形という語りの時制が現在形に変わるために、語りの媒介性の印象が薄れ、直接性の印象が高まるためである。一方、体験話法では語りの時制である過去形が保たれ（地の文が過去形である場合)、それとともに語り手の関与と媒介とが常に暗示される。両形式の時制の違いは、語りの媒介性、語り手の顕在度の違いでもある。ところですでに指摘したように、内的独白に先行する地の文はpersonalな語りであり、そこでは〈語る私〉は大きく後退していた。したがって、このような地の文に続く心情再現の手段としては、同じように語り手不在の印象を与える内的独白の方が、〈語る私〉と〈体験する私〉の二重視点を特徴とする体験話法よりも適していたと考えられよう。すなわち、内的独白選択のねらいは支配的な物語状況の維持にあったのではないか。しかし一方で内的独白は現在形であるため語りの流れを中断するという指摘も以前からなされている。[9] だがこの場合は、先行する地の文は〈体験する私〉の意識にのぼった外的事象、対してこちらは同じ人物の意識にのぼった内的事象で、ともに心の声である点では共通している。上述の引用②と③を見比べてみても文体が似ており、内的独白の選択はこの場合、語りの流れの断絶を生むというよりは、むしろpersonalな地の文の特徴でもある描写の直接性の印象を保持し続けると言えるだろう。

このように内的独白と体験話法の出現およびその選択には、それがどのような心情を再現するか（説明的・感情的）という要因に加えて、それが

9) Cohn, Dorrit: Erlebte Rede im Ich-Roman In : Germanisch-romanische Monatsschrift 50. 1969. S.305-S.313, S.312f.

埋め込まれている物語状況が影響している可能性がある。

2.3　心情再現の二形式の出現状況

〈私〉はこの後も周囲の状況から自分がどこにいるのかを知ろうと、なかば朦朧とした意識のなかで必死に想いをめぐらせる。そのなかで、〈私〉の思考の再現は内的独白と体験話法が混在しつつも、量の上では徐々に体験話法が主勢を占めていく。そこで物語全体における内的独白と体験話法の出現の状況を、ここで概観しておきたい。以下の表は、テクストの一頁ごとに地の文・内的独白・体験話法それぞれが占める分量を行数で示したものである。[10)]

頁	地の文	内的独白	体験話法	行数
1	27	0	0	1-27
2	34	1	0	28-62
3	29	6	0	63-97
4	11	23	2	98-132
5	24	2	10	133-167
6	21	6	9	168-202
7	9	6	21	203-237
8	31	2	3	238-272
9	23	0	12	273-307
10	23	4	9	308-342
11	23	0	0	343-365
%	68.7%	13.5%	17.8%	100%

10）行の途中で語りの様態が変わる場合は一行を2度数えたため、表の数字の合計は実際の行数(365行)より6行多い371行となる。各項目の全体に占める比率は371行に対するものである。
また、体験話法や内的独白と地の文の識別、特に境界の識別はコンテクストのみに依存することもあるため、ときに流動的である。表の数字は筆者の分析に基づくもので多少の変動の可能性はあることを付記しておく。

表から明らかなように、内的独白による心情再現は4頁目でピークを迎え、5頁目以後は体験話法が多くなっていく。

2.4 体験話法の出現

体験話法が初めてまとまった形で現れるのは次の箇所である。

④ „Wo sind wir ? “ fragte ich.
„In Bendorf.“
„Danke“, sagte ich und zog.
Immerhin schien ich wirklich in Bendorf zu sein, zu Hause also, und wenn ich nicht außergewöhnlich hohes Fieber hatte, stand wohl fest, daß ich in einem humanistischen Gymnasium war: Eine Schule war es bestimmt. Hatte die Stimme unten nicht geschrien: „ Die anderen in den Zeichensaal!“ ? Ich war ein anderer, ich lebte; die lebten, waren offenbar die anderen. Der Zeichensaal war also da, und wenn ich richtig hörte, warum sollte ich nicht richtig sehen, und dann stimmte es wohl auch, daß ich Cäser, Cicero und Marc Aurel erkannt hatte, und das konnte nur in einem humanistischen Gymnasium sein; ***ich glaube nicht, daß sie diese Kerle in den anderen Schulen auf den Fluren an die Wand stellen.***(142-156)

この場面は自分が故郷の町にいることを〈私〉が確信するところで、太字部分が体験話法と考えられる。[11] 一般に、一人称形式では人称転換がない分だけ三人称形式より体験話法の識別が難しいとされる。しかしこの箇

11) 引用箇所のゴシック体は以後もそれが体験話法であることを示す。

所には体験話法であることを示す文法的特徴が現れている。一つは2箇所で登場するwenn+過去形の形式（wenn ich nicht außergewöhnlich hohes Fieber hatte, / wenn ich richtig hörte,)が「もし～ならば」の意味で用いられていることであり、今一つは疑問文形式で感情表現がなされていること（Hatte die Stimme unten nicht geschrien [...] / warum sollte ich nicht richtig sehen, ）である。[12] またこの場面はテクストでは5頁目にあたるが、2.3の表からも見てとれるように、この箇所以降、つまり自分が母校にいる可能性が極めて高くなったことを知って〈体験する私〉の感情が高ぶり始めるところから、体験話法が内的独白を凌駕していく。これは内的独白は説明的、体験話法はより感情的な内容の再現という鈴木氏の指摘を裏づけるものである。しかしそれ以外にも体験話法選択の要因はある。地の文における語りの姿勢の微妙な変化との関連である。

2.5　地の文の語り

体験話法が現れる前の地の文では、引用①、②にも見られるように、〈体験する私〉が捉えた周囲の様子や自分自身の外的状況が、〈語る私〉による説明やコメントなしに語られている。内的独白が〈体験する私〉の心的現在を再現するのに対して、地の文は〈体験する私〉の知覚を通した状況描写を行うという役割分担である。こうした基本的役割はその後も変わらないものの、心情の再現形式が体験話法へと比重を移していくなか

12）鈴木康志 ibid. S.137 Z.17f./S.134 Z.8.
wenn+過去形は通常過去における出来事の反復を表し、未来における一度限りの出来事を表すのにそれが用いられることは普通ありえない。したがって、物語中に内容的に見れば条件文であるものがwenn+過去形で表現されている場合は、作中人物の現在形での発話や思考が、語り手の視点から再現されたために形式的に過去形になったものと考えられる。つまりwenn+過去形は体験話法識別の有力な手がかりとなりうる。
なお、本稿の執筆にあたり体験話法の文法的特徴に関しては特に鈴木康志氏と保坂宗重氏の諸論文を参照した。直接的な示唆を得たものを以下に挙げる。
鈴木康志:体験話法の識別法について『ドイツ文学』第88号　1992. S.77-S.88
鈴木康志:Erlebte Rede und Innerer Monolog im Ich-Roman — zu einer Darstellung dieses Problems in der Duden-Grammatik (3.u.4.Aufl.)—『筑波大学言語文化論集』第25号　1988. S.37-S.50
保坂宗重:体験話法—その文法的形態について—『ドイツ語学研究1』クロノス　1985. S.191-S.220

で、地の文に明らかに〈語る私〉の声と思われる箇所が現れ始める。比較のために上記の内的独白(引用②)の直前にある地の文をまず引用する。

⑤ Der Zeichensaal roch nach Jod, Scheiße, Müll und Tabak, und es war laut. Sie setzten mich ab, und ich sagte zu den Trägern: „Steck mir 'ne Zigarette in den Mund, links oben in der Tasche." Ich spürte, wie einer mir an der Tasche herumfummelte, dann zischte in Streichholz, und ich hatte die brennende Zigarette im Mund. Ich zog daran. "Danke", sagte ich. (86-92)

ここでは図工室に運び込まれた直後の〈私〉と担架の運び手とのやりとりが語られている。この部分の語りを構成しているのは、spüren, sagen, ziehenという動詞の使用に見られるように、〈私〉や運び手の所作や感覚の簡潔な報告と、両者の間で交わされた対話のみであり、〈語る私〉の介入は見られない。冒頭部の語りと同種のものと言える。しかし体験話法への移行と平行して、地の文に次のような微妙な変化が現れ始める。

⑥ Ich sah es: Ja, die Stadt brannte. (174)

⑦ Die Artillerie schoß ruhig und regelmäßig, und ich dachte: ***gute Artillerie!*** Ich weiß, das ist gemein, aber ich dachte es. Mein Gott, wie beruhigend war die Artillerie, wie gemütlich: dunkel und rauh, ein sanftes, fast feines Orgeln. Irgendwie vornehm. (199-202)

下線部分が〈語る私〉自身が声を出している箇所で、そこでは〈語る

私〉は過去の自分に感情移入している。⑦の例では〈語る私〉と〈体験する私〉との間に距離は存在するものの、〈語る私〉は重砲の発射音を心地よく感じた過去の自分を弁護しているので、これもやはり一種の感情移入と言える。こうした地の文での〈語る私〉の顕在化と体験話法の出現もやはり連動した現象であると思われる。というのも体験話法は、前述したように、語り手と作中人物双方の視点の重なった話法であり、ドリット・コーンの指摘するように、特に一人称形式での体験話法は〈語る私〉の〈体験する私〉への強い感情移入を前提とするからである。[13] つまりここでも心情の再現形式の選択は全体の物語状況の推移と関連している。そして内的独白から体験話法への移行および地の文での〈語る私〉の顕在化は、最初はpersonalな語りの中でほとんど姿を見せることのなかった〈語る私〉が過去の自分に感情移入し、過去の自分に声を重ねていることを示すものである。物語状況のこうした変化をより明確に示すのは、地の文でも〈体験する私〉の心情を説明したり、間接話法で引用するというこれまでに見られなかった語りの出現である。

⑧ Mir kam das alles so kalt und gleichgültig vor, als hätten sie mich durch das Museum einer Totenstadt getragen, durch eine Welt, die mir ebenso gleichgültig wie fremd war, obwohl meine Augen sie erkannten, nur meine Augen; es konnte doch nicht wahr sein, daß ich vor drei Monaten noch hier gesessen, Vasen gezeichnet und Schriften gemalt hatte, [...] (265-270)

ここでは、目が捉えた事実は自分の母校であることを明らかに示しているのに、自分の心がその事実を受け入れようとしないことに対する〈私〉

13) Cohn,Dorrit ibid.S.308f.

の葛藤が語られている。それまでは内的独白や体験話法が再現してきた〈私〉の心の揺れが、ここでは地の文において説明されている。

また、間接話法で〈体験する私〉の思考内容が引用される箇所もある。

⑨ Dann dachte ich daran, wieviel Namen wohl auf dem Kriegerdenkmal stehen würden, [...]. (205-206)

間接話法は語り手の視点から他者の言葉を引用するもので、体験話法よりも語り手の存在を強く感じさせる話法である。筆者の分析では、間接話法はこの後にも、もう一箇所で使われている。[14] 物語前半では皆無であった、こうした地の文での心情表現からも〈語る私〉の顕在化が窺える。

2.6 結末部の語り

では物語のクライマックス、黒板に書かれた自分の筆跡を見つける場面はどのように語られるだろうか。

⑩ Das war meine Handschrift an der Tafel. Oben in der obersten Zeile. ***Ich kenne meine Handschrift: Es ist schlimmer, als wenn man sich im Spiegel sieht, viel deutlicher***, und ich hatte keine Möglichkeit, die Identität meiner Handschrift zu bezweifeln. Alles andere war kein Beweis gewesen, weder Medea noch Nietzsche, nicht das dinarische Bergfilmprofil noch die Banane aus Togo, und nicht einmal das Kreuzzeichen über die Tür: Das alles war in allen Schulen dasselbe, ***aber ich glaube nicht, daß sie in anderen Schulen mit meiner Handschrift***

14) Böll, Z.240-Z.242

an die Tafeln schreiben. Da stand er noch, der Spruch, den wir damals hatten schreiben müssen, in diesem verzweifelten Leben, das erst drei Monate zurücklag: Wanderer, kommst du nach Spa ...

→Oh, ich weiß, die Tafel war zu kurz gewesen, und der Zeichenlehrer hatte geschimpft, daß ich nicht richtig eingeteilt hatte, die Schrift zu groß gewählt, und er selbst hatte es kopfschüttelnd in der gleichen Größe darunter geschrieben: Wanderer, kommst du nach Spa ...

Siebenmal stand es da: in meiner Schrift, in Antiqua, Fraktur, Kursiv, Römisch, Italienne und Rundschrift; siebenmal deutlich und unerbittlich: Wanderer, kommst du nach Spa ... (322-342)

ここは〈私〉が自身の筆跡を発見する最も感情的な場面であり、どこまでが体験話法でどこまでが地の文であるのか、特定が最も難しい部分である。識別のための明確な文法的特徴があるわけではない。しかし〈体験する私〉の心の声としてそのまま現在形に還元可能である、という点からみれば、内的独白部分を除くほぼ全部が体験話法であるとも言える。少なくとも内的独白にはさまれている„ich hatte keine Möglichkeit“ から „Das alles war in allen Schulen dasselbe“まで、そしておそらくはその段落の最後(das erst drei Monate zurücklag: Wanderer, kommst du nach Spa...)までは体験話法である可能性が高い。ではその次の段落はどうであろうか。次の段落の冒頭の文„Oh, ich weiß, die Tafel war zu kurz gewesen.“ においては（矢印箇所）、主文のOh, ich weißが現在形であるのに対して副文は過去完了となっている。ここでは激した〈語る私〉自身が声をだしているのである。したがってこの副文に続く、黒板に標語を書かされたいきさつを語る過

去完了の部分においても、〈語る私〉が今までになく前面に出てきている可能性がある。ではこの段落以降は地の文であるのか。しかしそれまでの地の文が主に状況描写を担ってきたことを考えれば、この部分は地の文としてはかなり質が異なっている。すなわちクライマックスにおいてはすでに、〈語る私〉の強い感情移入がもはや地の文と体験話法との識別を困難にしているのである。

3．結　び

以上の分析から全体の物語状況の推移が明らかになった。Personalな語りから〈語る私〉がクライマックスに向けて徐々に顕在化していく語りへの移行である。このような変化はどのような効果をもたらし、何を意図しているのであろうか。

一般にpersonalな物語状況では、読者は映し手となる作中人物に強く引きつけられ、その人物の立場に立ち、その人物に共感するよう促される。冒頭部の〈体験する私〉の意識を通した状況描写、および内的独白による心情再現が生み出すpersonalな語りのねらいもまさにその点にあったと思われる。それが途中から微妙に変化して体験話法へと比重を移していったのは、一つにはやはり、過酷な自己の戦争体験を再現する過程で〈語る私〉の感情が高ぶって、過去の自分に感情移入せずにはいられなかったからであろう。しかしここで気をつけねばならないのは、〈語る私〉は感情移入する一方で、ある種の冷静さをも保っている点である。というのも、〈語る私〉は、確かに物語後半で顕在化はするが、語り手としての自分自身に言及したり、出来事を経た人物としての感情や批判を露わにするまでに姿を現すことは決してないからである。彼は感情移入に伴う顕在化の度合いを〈体験する私〉の体験世界から決して逸脱しない範囲に留め、ひたすら〈体験する私〉の意識に自身の声を重ねていく。こうした一種の抑制

を伴った感情移入がこの物語の体験話法の特色であり、二つの重なる声は内的独白とは異なる効果をもたらしている。内的独白が読者に声の直接性の錯覚をもたらすのに対して、体験話法は声の強さの錯覚をもたらすのである。なぜなら、最初から強く〈体験する私〉に引きつけられる読者は彼の声のみを耳にしていると錯覚するため、後半そこに〈語る私〉の声が重なっても、それが同一人物であることもあって、識別はできないからである。読者は〈語る私〉を意識することなく、ただクライマックスに向けて高まっていく〈体験する私〉の声のみを感じ取ることになるだろう。そしてまさにそこにこそ〈語る私〉のねらいがあったのではないか。

クライマックスでは、„Wanderer, kommst du nach Spa...“という黒板に書かれていた標語が3回畳み掛けるように繰り返されている。〈体験する私〉が、驚愕の余り心の中でこの言葉を本当に3回繰り返し、〈語る私〉が忠実にそれをなぞったということは十分ありうる。しかしながら3回も繰り返されることで、この言葉は語り全体のなかで独特の意味をも帯びてくる。この標語は古代ギリシアの戦争の慰霊碑に由来し、第2次世界大戦中には、ナチによって戦意高揚・戦争賛美のためのスローガンとして、演説で、また軍国教育の中で度々用いられたものである。それまでの語りで暗示されてきた、〈私〉や隣に寝ていた兵士に迫る死の影、また個人の死のみならず町全体を覆う死の影とのコントラストで、無益な戦死を礼賛するこの標語はイローニッシュに浮き上がり、戦争に対する強い怒りを表現し、読者に衝撃を与える。これは、出来事を〈現実態において〉体験する、語られた世界の住人に過ぎない〈体験する私〉にできることではない。〈体験する私〉の驚愕は、まずは自分の筆跡を発見したことに対して向けられたもので、この言葉の意味に対して向けられたものではない。出来事全体に意味を与え、„Wanderer, kommst du nach Spa...“という言葉に戦争批判の気持ちを滲ませ、それを読者に伝えることのできるのは、痛切

な体験を経た〈語る私〉だけである。〈語る私〉は最後のこの一点においてこの言葉を3回繰り返すべく、しかもそれを〈体験する私〉を隠れ簑に繰り返すべく、それまでの語りを統御してきたのではないだろうか。Personalな語りのなかでの内的独白から体験話法への移行は、〈体験する私〉の口を借りて最後に〈語る私〉自身が声を挙げるために必要なプロセスだったのではないだろうか。

以上の考察から、〈語る私〉は実はかなり冷静に語りの戦略をたてて臨んでいたことが窺える。しかしその冷静さは過去の出来事に精神的距離をおいた人間のそれではない。自らの言葉は内に封じ込めた人間の、過去の自分に託した、抑制された、しかしそれだけに強い怒りの表れなのである。

Die verborgene Wut
—— die Erzählstruktur von „Wanderer, kommst du nach Spa...“ ——

Mari Kawaguchi

Beim vorliegenden Aufsatz handelt es sich um förmliche Aspekte von der Erzählung Heinrich Bölls „Wanderer, kommst du nach Spa...“, und zwar um die Analyse über die Veränderungen der Erzählsituation.

Dabei wird auch die Rolle des inneren Monologs und der erlebten Rede, die in dieser Ich-Erzählung häufig auftreten, überprüft.

Die Geschichte beginnt in der personalen Erzählsituation, in der das erzählende Ich zurücktritt und sich der Darstellungsfokus stark auf das erlebende Ich konzentriert. Anschließend an der Darstellung der Außenwelt aus der Sicht vom erlebenden Ich kommt die innere Monolog vor. Als Mittel zur Gedankenwiedergabe vom erlebenden Ich aber wird der innere Monolog allmählich durch die erlebte Rede abgelöst. Pararell dazu tritt das erzählende Ich zunehmend in Erscheinung.

Die Veränderung des Erzählverhaltens vom Zurücktreten zum Hervortreten, und die Verlagerung vom inneren Monolog zur erlebten Rede deuten an, daß sich das erzählende Ich bei der Wiedergabe seines harten Kriegserlebnisses aufgeregt ins erlebnede Ich einfühlen mußte. Seine Einfühlung ist allerdings von einer Zurückhaltung begleitet, weil er den Darstellungsfokus immer auf das erlebende Ich fixierte und nicht einmal seine Figur und Meinung als Erzähler offenbaren wollte. Aus dieser Kontrolle über

den Erscheinungsgrad könnte man ablesen, daß das erzählende Ich nur durch den Mund des erlebenden Ichs eigene Kritik am Krieg ausdrücken wollte. Der innere Monolog und die erlebte Rede sind Mittel, seine Figur vor Leser zu verbergen und seine Wut mit der Stimme des erlebenden Ichs zu erzählen.

（慶應義塾大学非常勤講師）